

といつても健康保持が第一なのです。食糧の確保とカロリー下限をどの辺で保持させるかで責任は重く苦勞したものです。

炊事班での仕事は帳簿つけと湯茶当番でした。中でも米の確保でした。小原主計中尉が交渉してきて旧日本軍が貯蔵していたものをもらつてきて、苦勞して空ドラム缶の中につめ、夜間作業で各兵舎の床下に埋めたのです。豪州兵が指示した定量では腹が減つてもたない。二重帳簿で米の受け払いと糧抹庫の出入りは、班長と助手をしていた私の仕事であつた。

このような抑留生活も、ずっと初年兵のままなのです。内地出発が初年兵、以来一人の後統部隊もきてくれない。敗戦間近い外地勤務であつたので止むを得ない状況でした。それでも昭和二十一年三月一日付で兵長に進級ができ、やがてついに内地送還の日がきたのでした。

昭和二十一年六月九日パレパレ港より出航する日はみんな豪州兵の服装検査を受け、制限内の服装だつたのです。タバコも一人二〇〇本だったが私は吸わない

ので准尉の分も持つて乗船したものです。

十九年四月の内地出航のときと違い、復員のときの船足の早いこと、十四日目（六月二十三日）には和歌山県の田辺港に上陸して同日復員完結し、召集解除となつて奈良県を通過し、滋賀県の草津駅に下車することができました。ちょうど田植えが、もう少し残つていたわが家へ落ち着いたのです。

終戦後の食糧事情は農村であつても供出のやかましいときで、苦しいものでした。出征中の労力不足で、預かつていた三反余りの田は返還され、留守を守つていた妻と父母は大変に苦勞したことだろうと、その労苦に深く感謝していたものです。

戦闘の無い戦歴

茨城県 猪瀬 良一

「あなたの先の大戦における旧軍人軍属としての御苦勞に対し衷心より慰勞します。」

海部総理大臣よりの書状なるものを、私は、我が家の一等室に掲げている。私はこの書状でいうところの先の大戦に、抑留生活を合わせ二年七ヵ月従軍した。すなわち、旧軍人短期在職者の一人である。

私が入隊したのは、昭和十八年十二月一日。水戸東部第三十七部隊第三機関銃中隊であるが、私は、十五名の者と共に、大隊砲教育班であった。ここでの初年兵教育は想像以上に過酷なもので、教練はもとより、内務班では、禁ぜられているはずの私的制裁が堂々と罷り通っていた。後で判ったが、私達はいわゆる学徒出陣組がほとんどで、幹部候補生要員だったために、「貴様等は半年もすれば見習士官になって帰って来て対面するんだ。焼きを入れるのは今のうちだ。」という。上等兵や古年次兵の羨望のような感情が、憎しみになっていたようである。中隊長の精神訓話の時間に、居眠りをしたという廉で、一月中旬の、十センチ位も氷が張り詰め、背丈以上も深い防火用水槽へ飛び込まされたようなこともあったが、とにも角にも苦しかった一期検閲も終わった。

翌十九年五月一日、一装用の上衣の襟に、伍長の階級章と座金をつけ、甲種幹部候補生として、豊橋第一予備士官学校に入校した。歩兵砲中隊、大隊砲第四区隊である。「鬼の天伯、涙の高師」といわれた練兵場での訓練は、初年兵教育にも増して酷しくはあり、時として、対向ピンタを課せられたりはしたが、同列同級であるので、私的制裁は全く無いので、水戸の部隊よりは、遙かに気が楽であった。

ところがその頃、特別幹部候補生制度が出来、私達十一期生は、教育中にして、彼等に学校を明け渡さねばならぬこととなった。京都福知山の中部軍教育隊と南方軍教育隊とに分けられ、私は南方軍派遣となり、九月十四日、在校四ヵ月余りにして豊橋予備士官学校を後にした。

出発前に、家族との面会が許可された。幼少にして父を亡くしている私は、母が女一人で茨城の田舎から出て来る苦勞を思うと、迷う心もあったが、南方行きとあっては、これが今生の別れかも知れぬ。女の細腕で今日まで育てて来た伴の最後の姿を見せるのも親孝

行かとも考えて、面会の日時を知らせた。

母は、一人の叔父と共に面会に来た。この薄幸の母のために、何とか生き残らねばと思うものの、可哀想だがそれは不可能だろうと観念していた。母も同じ気持ちであろうことがその表情に読み取れた。

九州の博多で一ヵ月待機して、輸送船に乗船したのは、十月十五日午後三時頃であった。山下汽船所屬の「山園丸」六千トンである。新造船で処女航海ということだが、船首に向かって甲板が左へ十度位傾いている。積荷のバランスによるのだろうか、不吉な予感があった。

乗船が終わると直ちに出港し、その夜は唐津湾へ投錨。払暁までに船団を組み終わると一斉に錨を巻いた。兵員と兵器弾薬を満載した六千トン級貨物船二隻、二千ないし三千トン級小型タンカー十三隻、計十五隻の輸送船団である。護衛艦は海防艦か哨戒艦か、それとも駆潜艇か、陸軍の我々には分からない。

その夜から敵潜水艦の攻撃を受けた。「敵潜水艦二隻我が船団に潜入せり、各員直ちに退船準備をせよ。」

船内放送が単調なエンジン音を打ち消す。東支那海舟山列島近海で、ついにタンカー二隻が轟沈させられた。「山園丸」にも一発の魚雷が命中したが、不発だったので命拾いをした。

サイゴンへ寄港し、食料と飲料水を補給し、昭南港（シンガポール）へ無事上陸したのは博多港から二十八日目の十一月十二日であった。南兵舎というところで一週間宿営し、昭南駅から軍用列車でクアラルンプール経由、マラッカ海峡に面したポートジクソン、シルサの南方軍下士官教育隊で入校式が行われたのは、十二月一日であったと記憶している。

ここでの教育は、豊橋で残った教程のほかに、対戦車肉迫攻撃。斬り込み作戦等より実戦的訓練に重点を置かれたものであった。そして翌二十一年三月三十一日、予備士官学校を卒業。私はビルマ派遣軍森七九〇〇部隊へ転属の命を受け、四月十日、ビルマ方面軍へ転属の見習士官二百八十名とともに、ポートジクソンの駅を發った。ところが出發して間もなく、私は發熱してしまった。クアラルンプールで乗り替えて列車は北上

を続ける。この列車には二百八十名の見習士官以外は、軍医はおろか衛生兵一人乗っていない。熱は四十度前後と思われ、食物は何一つ受け付けない。

マライとタイの国境を過ぎて間もないトランという町の衛生隊で、やっと軍医の診察を受け、真性腸チフスと診断され、近くの第四野戦病院へ入院させられた。入院して一週間もすると、どうにか熱も下がり始め、何とか命拾いをするのが出来た。七十キロあった体重は四十キロそこそこにまで減っていた。

入院して一ヵ月ほど過ぎた五月二十四日、第四野病が転進することになり、私は独歩患者十六名を指揮して、十キロ離れた衛生隊へ転じ、さらに数日して、マライ北端の町スンゲーバタニーへ移動を終わっていた第四野病へ移された。

私はすでに、何時退院してもよい健康を取り戻していたが、転属先の司令部の所在が判明せず、ずるずると病院暮しをしていた。そして八月十八日、病院長の奉読した終戦に関する御詔勅によって敗戦を知った。

それから半月ほどして私は、第九十四師団威烈兵団

歩兵第二五七連隊へ転属し、スンゲーバタニー飛行場で、英軍から降服閩兵式をやらされた後、クルアンの検問所を通過し、シンガポール港から乗船、スンダ列島の南レンバン島多根岬へ到着したのは十二月二十七日であった。私の小隊は、マライ半島で作業隊に出たので、約一ヵ月遅れての原隊復帰であった。

ここでは、英軍からの食糧支給が少ないので、栄養失調で寝込む者が続出していた。私は農家出身というので農耕係を拝命。どうにか動ける兵隊を激励しながら、ジャングルの開墾を急いだ。早く自給態勢を立てねば餓死のおそれがある。やがてタピオカや甘藷が育ち、支給食料を補い、兵隊の栄養も僅かながら改善され、そして待望の復員船に乗船の日が来た。

昭和二十一年六月十三日。米軍から貸与された、リバティー型「ジョンカレット号」七二二六トンは、祖国日本へ向かって錨を上げた。

六月二十九日。宇品港へ上陸。同日復員完結。二年七ヵ月の軍隊生活は終わった。このように私の戦歴には、幸いにして、華々しいあるいは悲惨な戦闘は無か

った。だが、限られた紙数では書き尽くせぬ数々の苦難、そして死線を越えることの出来た幸運は生涯忘れ得ない。

かつてこの大戦を、単に軍部の暴挙とのみ見ることを私は好まない。それはさておき今、日本は、世界一の経済大国。長寿国といわれている。大戦によって失われた尊い命は申すまでもなく、幸運にも生き残った我々こそ、今日の平和で豊かな日本を築いた礎であるとの誇りを持ち、残された人生をさらに意義あらしめんためにも、精一杯生きて行かねばならないと思う。

軍国一色青少年時代回想記

愛媛県 中川 啓 夫

私は大正前期に生れ、六十九歳で、子供五人、孫五人あり、今の社会でいう高齢者に編入しました。

昭和七年一月上海事変勃発、その頃より非常時という言葉を耳にするようになり、小学校の運動会にも軍

事教練が取り入れられ、中隊、小隊の訓練をしました。軍国主義の歩みは日一日と高まり下校して家に帰ると近所の友達四、五人集まれば兵隊ゴッコが始まり、男子として生を受けしことを誇りに思ったものです。

昭和十二年七月支那事変勃発、在郷軍人に召集令状が来るようになり入営兵士、召集兵士を万歳歓呼の声で送ったものです。歌は世につれ、世は歌につれと申しますが「勝つて来るぞと勇ましく」の軍歌を、元気一杯歌い見送ったものです。

昭和十三年頃になりますと勇ましく送りし勇士の無言の凱旋が始まりました。歌は「軍国の母」……生きて帰ると思うなよ白木の箱が届いたら……。悲しみの中にも勇氣百倍、今度は僕達の番だと意気高揚しました。

昭和十四年五月ノモハン事変勃発、親族にも元陸軍航空准尉辰己清重氏も空中戦にてノモハンの華と散りました。その頃、海軍航空隊を讃える歌は、

密雲低くたれこめて、

古都南京の暗き空、